

書評

中村邦生著『風の消息、それぞれの』

高山敏幸

『日本文学研究』第四十四号に、氏の第一作品集『月の川を渡る』の書評を書かせて頂いた。その結びに、一読者として他の短編を収録した作品集の刊行を期待していると書いたが、二年足らずでそれが叶ったことに嬉しさを覚えている。氏の小説に登場する人物たちの静かな生の軌跡は、それぞれの作品を越え、重層的に響きあう。読み進めてゆくと、まるで独唱がいつのまにか斉唱となって胸に響いてくるような、そんな感覚に襲われる。本書の帯にある小島信夫の推薦文にもあるように、「登場人物たちのひとりひとりに歩み寄っていきたくなる」のである。新たな単行本の刊行によって、その機会が訪れたことを喜びたい。

本書には、「森への招待」、「泣き塾」、「この道、通りゃんせ」の三作品が収録されている。初出は、「森への招待」が『文學界』一九九五年十二月号、「泣き塾」(「黄昏のざわめき」改題)が『文學界』一九九八年十二月号であるが、「この道、

通りゃんせ」は書き下ろしである。雑誌に既出の二作は、第一二回芥川賞候補となった「ドッグ・ウォーカー」をものしてから約五年の間に書かれたものに加筆訂正を行ったものである。作家としての姿勢が確立されつつも、新しい息吹を作品に吹き込もうとする手つきが感じられる。個々の作品を見てゆこう。

「森への招待」は、文學界新人賞を受賞した「冗談関係のメモリアル」から「ドッグ・ウォーカー」へと連なる人間関係の小さな齟齬と、その距離感に漂う奇妙なユーモアというモチーフを深化させたものといえよう。日本人の中年サラリーマンと、カナダ人の妻の夫婦関係、その妻と彼女がカナダに残している親たちとの家族関係に焦点を合わせつつも、それに照応するように、登場人物たちもめいめいのすれ違い、思い違い、勘違いを演出する。その鮮やかな筆致が評価され、第一一四回芥川賞の候補になったが、惜しくも受賞は逃した。

選者であった田久保英夫は、次のように述べている。

浅間山麓の夜の山歩きを通して、カナダ人の妻との心の屈折を描いた作品だが、森の闇の中に、視覚、聴覚、触覚を、独特の鋭敏さで具体的に働かせている。カナダの家族との間に、深い傷を負った妻との心理の読みも、一面的にならず、ある優しさが伝わるし、最後に妻も同行する夜の山歩きで、森の草木や生き物たちと、人間との等価な命の交響世界が浮かび出^{*1}る。

内向の世代と言われる作家の評として、至上のものであることはいうまでもない。だが、この作品の魅力は、心理の読みが一面的ではないというより、それが失効する場にこそあると私は思う。カナダ人の妻は兄とボーイフレンドとの事件、そして事件後の両親の態度に傷ついて日本にやってきました。夫は妻をカナダの家族と和解の再会をさせようとするが、彼女はそれを拒む。関係の修復の機会は与えられても、それは引き延ばされつづける。そこには、心理的な帰着はない。ただ、曖昧に決着を遅延しようとする優柔不断さがあるだけである。だが、独善的な結論を避け続けようとする態度は、むしろそこで生起する感情の柔らかな側面を深く描き出す。この作品には、決定的な事件はあっても、それを解決する術など存在しないのだ。適当で頑丈だが優しい日々の積み重な

りが、読後に迫る。また、夫と友人との関係についても、より不思議な距離感のあるものになっていることも述べておきたい。

そうした物語への姿勢が、「泣き塾」では、もはや倫理的にまで徹底される。大学の研究補助員をしているある青年は、ひよんなことから知り合いになった同じ賃貸マンションに住むシングルマザーの歯科医に子守りを買って出る。愛情遮断症候群のために泣き声の出せない赤ん坊を抱いて散歩していると、高校を中退した女の子に声をかけられる。女の子の父は「泣くことを勉強する塾」をひらいているという。赤ん坊のためと勧められた青年は、その塾を確かめに行く。

『文學界』に発表された際、つまり「黄昏のざわめき」には、教え子を自殺させてしまった青年の父の自死と思しき死や、塾を開いている真由の父の誕生日とその妻の命日が同じであること、赤ん坊の父親とシングルマザーとの関係が語られていた。だが、「泣き塾」ではそれが削られている。もはやここには、決定的な事件すら起き得ない生が描かれる。もちろん、登場人物には物語がある。だが、小説が物語に頼りはじめてしまうことは、なんてことのない日常の否定につながる。生きている者に物語など必要ない。必要なのは、いかに生きることを肯定するか、である。末尾近く、青年は「誰か一人が泣きだすたびに、どこかの誰かが泣きやむんだってさ」と女の子に諭される。ミニマルな日常と世界を安易には

結合させず、しかし世界の総量をあくまで日常から描き出そうとする氏の語り口は、日常そのものに驚くほどの色彩をあたえよう。

日常への静かな愛情は、「この道、通りゃんせ」にも色濃い。一九六十年代末に大学時代を送ったかつての同級生たちと西新宿の高層ビル群を逍遙していた筈の男女たちは、記憶と空間の迷宮に迷い込んでしまう。しかも、そこである強烈な出会いが待っているのだが（それは本書を読んで頂きたい。氏一流のユーモアが堪能できるはずである）、それすらも現実であり得ることとしてしか語られはしない。幻想小説と評することもできるかもしれない。だが、それは適当ではないだろう。記憶の海に流されているうちに、見慣れた筈の風景が一変してしまうことは、我々にもおおくあることだ。

本書を読んでいて、社会学者大澤真幸の次のような言葉を思い出した。彼は〈私〉を一つの宇宙と比喩し、こう分析する。「ところで〈他者〉はこの宇宙内の要素ではありえない。〈他者〉は〈私〉の宇宙を構成しているのと同じ活動が帰属しうる、もう一つの宇宙（の準拠点）だからである。その意味で、〈私〉の活動は〈他者〉には絶対に届かない。しかし、まさにその「届かない」という遠隔性において、〈他者〉は〈私〉の活動に随伴しているのだ^{※2}」

〈他者〉を書こうとすると、小説は単なる彼我の距離の遠さか、〈他者〉の不条理性に傾く。しかし、氏はそのような

安直な道に進もうとはしない。氏の書こうとするのは、〈他者〉の絶対的な遠さをあえて測定しようとしないうことであり、その遠さに途方もなく幻惑されてしまうことである。だからなく祈ること。おそらく、それが氏にとって〈他者〉を描きうる唯一の方法であり、本書はその魅力的な到達点なのだ。

※1 『文芸春秋』一九九六年三月号

※2 大澤真幸編『社会学の知33』新書館 二〇〇〇年四月

（二〇〇六年七月 作品社刊 一七五頁）